

国際日本研究 フェローシップ ニュースレター

2014年6月発行 創刊号 Web版

●目次

招聘研究者が語る 日本での滞在研究	p. 1
海外における日本文化研究の現在	p. 5
本フェローシップの受入機関Ⅰ(受入中)	p. 8
本フェローシップの受入機関Ⅱ(受入開始)	p. 10
博報財団「国際日本研究フェローシップ」	p. 12

博報財団

HAKUHO FOUNDATION

子どもたちと、未来のあいだに

博報財団「国際日本研究フェローシップ」は2006年の開始時から、海外で日本語・日本語教育に関する研究を行っている優れた研究者を日本に招聘してきました。滞在型研究の場を提供することで、世界における日本研究の基盤をより充実させ、研究者の活動を通して海外の日本への理解を深めることを目的としています。2014年の第9回招聘からは、日本文学・日本文化領域も招聘対象とし、より広い範囲での日本研究の拡大と振興をめざしています。このニュースレターで、過去の招聘研究者インタビューや受入機関ごとの特徴紹介などから、日本で滞在型研究を行う魅力を感じていただきたいと思います。

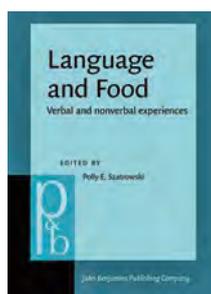
The Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship has invited international scholars of Japanese language and Japanese language education to Japan since 2006. The goal of the program is to enrich the foundation of international research on Japan and to promote a better understanding of Japan across the world by providing opportunities for international scholars to live and conduct research in Japan. In order to promote a wider scope of research on Japan, the ninth annual call for applications for the fellowship in 2014 expands the eligible criteria to include research on Japanese literature and Japanese culture, in addition to research on Japanese language and Japanese language education. This newsletter includes interviews with former fellows and information on the characteristics of hosting institutions, and illustrates various benefits and advantages of conducting research through an extended-stay in Japan.

日本を学ぶ、日本で究める

招聘研究者が語る 日本での滞在研究

博報財団「国際日本研究フェローシップ」により日本滞在研究を行った研究者は、第9回までで28ヶ国・地域にわたり、研究者同士の連携を生み出している。ここでは、4人の招聘研究者の研究内容と日本滞在研究の成果を紹介する。

Over the past nine award periods of Hakuho Foundation Fellowships, scholars from 28 countries and regions have come to Japan to conduct research, generating scholarly cooperation. This section presents the various themes and outcomes of the research projects conducted in Japan by four former Hakuho Foundation fellows.



なま 生の言葉を求めて 食事をめぐる会話を研究

ポリリー・ザトラウスキー Polly SZATROWSKI

アメリカ合衆国 ミネソタ大学 言語学研究所 教授

[研究タイトル] 日本語と英語による食べ物に関する会話のモダリティとエビデンスシャリティ

[招聘期間] 2012年10月1日～2013年8月31日

[受入機関] お茶の水女子大学

日本に滞在して見えてきた 場面や相手で変わる言葉の使われ方

ポリリー・ザトラウスキー先生は、日本語を専門とする言語学の研究者だ。「言葉が社会で実際にどう使われているか」に着目して研究を行ってきた。先生が日本語を学び始めたのも、生の言葉に触れるために長期滞在できる国を探していたことがきっかけだ。

通常、言語学では、実際の会話から表現を部分的に取り出して、「これは断定保

留だ」「直感的確信だな」などと認定し、法則づける。だがザトラウスキー先生は、「実際の会話には流れがあり、場面や相手に応じて表現を使い分けているはずだ」という。日本に滞在してフィールドワークを重ねるうちにその実態も見えてきた。「日本人は同意を得るために、相手の反応によって評価の仕方を変化させます。英語ではまず“I think...”から評価を始め、相手の意見を求めずに一貫して自分の意見を述べていく傾向がある。一方、日本語では、食い違った意見が出ると、

話し手は『～と思う』を用いることで自分の意見を強調したり和らげたりしながら話をまとめます。“I think...”と『～思う』という類似した形式でも、相互作用によって使い方が異なるのです。会話のやりとりのなかでも『評価』はとりわけ、個人のなかにだけ存在するものではありません。会話の参加者がお互いの言語・非言語行動から『次にどのような評価が出るか』を予測しながら、時間とともに展開させていく複雑な行為なのです」

たとえば味の評価において、ある人が「甘い」と否定的に評価するのに対し、相手が「でもあたしこれ全然好きだわ」と好意的に述べたとする。すると、しばらくして、最初の人に「甘いものとして出ているからいけるのかもしれない」と、相手に歩み寄りの変化が見られるなど、会話の相手の表情や反応から評価が変わっていくことがあるという。

「食事と言語」という 新しい研究分野を開拓中

ザトラウスキー先生は第7回招聘による日本滞在研究で、食品科学において優れた研究実績のあるお茶の水女子大学で、「食事と言語」をテーマにした、領域をまたぐ研究を行った。同大学の食品栄養科学コースの先生方とのコラボレーションによって、料理の評価についての新しい視点や気づきがあり、自身の研究に深みが増した、と先生は語る。

「食品栄養科学コースの香西みどり先生が構成し、福留奈美講師が指導している『色・音・香 おいしさのサイエンス』という授業に参加しました。授業では、『野菜を塩でゆでる』、『酢でゆでる』など実験条件を変えて調理して、味、色、音、香り、固さなどを観察、評価した結果を、温度や時間などの数値とともに論理的に考察して報告します。その報告が、味わいや食感の微妙な違いをどのように表現しているかという点に、私は注目しました。回を重ねるごとに、食べ物の状態を注意深く表現できるようになっていく、その言語的変化の過程に、特に興味を持ちました」

じっくり養ってきた観察力が 新たな研究領域を拓いて行く

言葉の実態を調べるザトラウスキー先生にとって大切なのが観察力だ。そのことを教えてくれたのは、コーネル大学の日本語教育と言語学の恩師だった。

「その先生は『日本語と英語に同じところがあつたら驚きなさい』と仰っていました。それほど両者は違うわけです。『どのように違うかを認識できるように観察力を養いなさい』と教わりました」

ザトラウスキー先生の「観察力」は、日本滞在中にも発揮されている。たとえば、現在の「食事と言語」という研究テーマにつながるこんな気づきがあった。

「日本には何故これほど多くの料理番組があるのかと、不思議でした。それも、単に食べるだけではなく、必ず味について評価します。そして、マイナスの評価をほとんど言わない。これはアメリカや他の国の文化とは異なるところですね」

ザトラウスキー先生に、現地で滞在研究する利点を語ってもらった。

「違う国や言語を経験することで、視野が広がります。日本滞在中には、お茶会にも参加しました。茶道では、季節を感じさせる花を床の間に飾り、茶道具や菓子を選ぶなど、亭主の心遣いや裏にある

ストーリーを話すんです。お客も、花を見てどう思ったかを語ります。そうやって日本文化には、色・食感・味・香りの楽しみ方も、それを表現する方法も数多くあることが実感できました」

In Search of Language in Real Life Contexts: Research on Conversation about Food

As a linguist specializing in Japanese language, Prof. Szatrowski has focused her research on the ways in which language is used in real social contexts. She notes that conducting fieldwork in Japan enabled her to observe the ways in which Japanese speakers use different expressions depending on the occasion and whom they are in conversation with, and how they alter their ways of expressing evaluations of the subject matter in order to reach an agreement. During her research period as a Hakuho Foundation fellow, Prof. Szatrowski conducted an innovative interdisciplinary research project on “Food and Language.” Participating in classes on food and nutrition, she examined how the subtleties of tastes and textures were expressed, and how linguistic transformations took place among participants as the coursework progressed. She also participated in tea ceremonies, where she observed how various elements such as seasons, food, flowers, and teaware comprised the narratives told during the ceremonies. This experience helped her better understand the varied ways in which color, texture, taste, and fragrance are enjoyed and expressed in Japanese culture. She notes that conducting research in Japan allowed her to utilize her observational skills and obtain new perspectives.



日本で実感した慣用句・諺を モンゴルでの日本語教育に活かす

ツルバートル・オノン TSULBAATAR Onon

モンゴル国 モンゴル国立大学 モンゴル言語文化学部 上級教師

【研究タイトル】日本語の慣用句における文化的解釈

【招聘期間】2013年10月1日～2014年3月31日

【受入機関】早稲田大学

言葉は文化の入り口 慣用句と諺を用いた総体的な学び

ツルバートル・オノン先生が滞在中に研究したテーマは「日本語の慣用句における文化的解釈」。研究を応用して、学習教材の開発に活かすという。「学習者が興味をもつような慣用句と諺を紹介するんです。たとえば『鯖を読む』。この慣用句がどういう意味で、どうやって生まれたのかと不思議に思いませんか?」

母国での授業では、まず慣用句の意味と背景について学習者同士で議論した後に、先生が解説する。なかには、モンゴルでは

考えにくい発想や、馴染みのない事物に由来する言葉もある。オノン先生自身が驚いたのは、日本の「雨」をあらわす言葉の多様さだった。日本語には「梅雨」「驟雨」「狐の嫁入り」など雨にまつわる表現が数多くあり、「雨男」のように雨をネガティブに捉える言葉も少なくない。年間降水量が少ないモンゴルは雨を有難がる風土なので、当初は意外だったという。けれども日本で暮らすことにより、そうした言葉の意味を身をもって理解できるようになった。「言葉はその文化の一部であり、入り口です。何気ない慣用句を通じて、歴史や文化の総体を知ることでもできるのです」

先生が今回の滞在中で重点的に調べたのは、先行研究と辞典。『ことわざ辞典』や『慣用句辞典』を古いものから新しいものまで読みました。実は、モンゴル語にはこういう辞典がないんです。ほかに、日本ことわざ文化学会で発表を聞いたり、受入担当教授のゼミの日本人学生さんが、慣用句をどれだけ知っていて、どう使っているのかを質問したりしました」

日本滞在中の他研究者との 議論で得た気づき。 新しい日本語学習教材開発に向けて

滞在中に同じ研究室になった韓国・中国の研究者や日本語教師と情報交換する機会も多かった。各国の慣用句・諺についてヒアリングし、視野が広がったようだ。受入機関以外での活動でも、過去の留学で知り合った研究者や滞日中の教え子たちと、研究テーマにとどまらずに議論し、新たなアイデアを得たと話す。「モンゴルでは指

導教官に確認してもらいながら、ひとりでコツコツ進める研究しかできません。日本滞在中は、他の研究者と対話することでより多くの気づきを得られます」

国際交流基金・日本語国際センターでは「モンゴルの日本語教育事情」をテーマに、東京海洋大学では「協働学習」をテーマにポスター発表をした。「日本人、外国人を問わず、学生からベテラン教師までの多様な人々と議論をしました。私と同じような教授法をしている人もいて、授業の実践をめぐって意見も交わしました」

オノン先生は、帰国後の展望も語ってくれた。「モンゴル日本語教育研究会で発表をする予定です。私の実践例を伝え、他

の人にも使えるようにすすめる一方、異なる意見を取り入れて議論を深めていきたい。川柳を教材に用いる人もいます。慣用語と諺の研究を活かして、新しい学習教材をつくろうと考えています」

Utilizing Real-Life Experience with Japanese Idioms and Proverbs in Japanese Language Education in Mongolia

Dr. Onon conducted research on Japanese idioms from a cultural perspective. She focused in particular on surveying existing research on Japanese idioms and examining various dictionaries of Japanese idioms and proverbs. She maintains that analyzing the casual use of idioms can contribute to a more

comprehensive understanding of the history and culture behind the language concerned, and she notes that her lived experiences in Japan enriched her own understanding of Japanese words and expressions. Dr. Onon also appreciated having ample opportunities in Japan to exchange ideas and information with a diverse range of researchers and instructors of Japanese language from various countries. The discussions she had through activities in and outside her host institution in Japan widened her perspective and gave her new ideas. She hopes to share her findings with scholars in Mongolia, and to enrich scholarly discussions through the incorporation of a variety of viewpoints. She also hopes to apply the results of her research to the development of new instructional materials.



非漢字圏の文化だからこそ取り組めた漢字の画期的な学び方

ヴォロビヨワ・ガリーナ VOROBÉVA Galina

キルギス共和国 キルギス国立総合大学 国際教育プログラムインテグレーション学院
コンピューター技術・インターネット学部 上級日本語講師

【研究タイトル】漢字字体の階層性構造の分析とそれにもとづく『千話一語 漢字物語』漢字教材作成

【招聘期間】2007年10月1日～2008年3月31日、2011年10月1日～2012年9月30日

【受入機関】国立国語研究所

漢字を親しみ深く わかりやすくする工夫の数々

ヴォロビヨワ・ガリーナ先生は、非漢字圏における漢字教育・習得の画期的な研究を行っている。漢字を覚える難しさは、日本語に習熟した後だと忘れがちだが、初学者には日本語習得上の大きな壁だ。

「漢字は、形や意味や読みに加えて筆順や熟語を覚えなければなりません。練習しても翌日には忘れてしまっ、私も勉強しはじめたころは大きなショックを受けたものです」

ヴォロビヨワ先生は、大学では数学を専攻し、大手企業コンピュータ部門の部長代理として働いていた。だが、キルギス共和国では初めての社会人用の日本語教育機関であるキルギス日本センターが設立されると、その直後に入学し、46歳で日本語を学びはじめた。そうして日本語教員になり、今や研究者の道を歩んでいる異色の経歴の持ち主だ。数学と言語学をつないだ独特なアプローチで漢字の構造を分析し、その成果を漢字教育で応用している。

先生が考えたのは、漢字を集中的に学べて、習得が楽になる教材だ。数学的なアプローチから漢字を分析したらよいのではないかと考え、研究をはじめた。まず、漢字

の成り立ちをストーリー仕立てにして解説する初級レベルの『漢字物語I・II』を執筆。非漢字圏の学習者にも馴染みやすいよう、漢字教材のなかで漢字の筆順をアルファベットに対応させ、数字と文字で探せる新しいタイプの漢字索引もつけた。

ヴォロビヨワ先生は、さらに研究を進めるために、第2回招聘に申請。国立国語研究所の横山詔一教授のもとで、漢字の書記素と構成要素の使用頻度、現行の漢字教材の漢字学習配列を解析。その結果に基づいて、漢字の構造的複雑性や合理的な学習順番を検討した。効率的な漢字学習の支援を目指し、個々の漢字構造やさまざまな漢字群を分析、その成果をもとに新しいタイプの漢字索引や漢字指導試案を開発したのだ。また、さまざまな新しい教え方を取り込んだ日本語教師用の効果的な漢字指導法の手引きをロシア語で執筆し、インターネットで公開した。

その後、第6回招聘で滞在研究した際には、初・中級レベル用の『千話一語 漢字物語』の執筆において漢字字体の計量的分析を応用した。漢字の学習配列を、漢字の階層構造分解に基づいた、連想記憶法を効率的に使える順番にしたのだ（ストローク、片仮名、構成要素、単体文字から合体文字へ）。さらにインターネット上で自由

に使える、教科書のデジタルバージョンも作成。学習者は教材を使用することで、漢字の学習順番を「漢字意味ネットワーク」に基づき自由に決められるようになる。

先端的な理論でつくる教材と 試行錯誤できる環境

ヴォロビヨワ先生にとって、日本で滞在研究を行うことの意義はなんだろうか。

「効率的な教材を作成するためには先行研究を学び、体系的なアプローチを考える必要があります。私の考えたさまざまなアプローチについて、日本人の意見をすぐに聞ける環境は素晴らしいです。国立国語研究所では、自分とは異なるジャンルの研究会に積極的に参加し、新しいアイデアをもらいました」

滞在中に得た財産で、日本語を学ぶ人々に役立つ方法を開発したいと先生は語る。

「漢字が難しいために日本語習得を挫折する人もいます。そういう人には、漢字を、ひとつの情報を伝える便利な記号と思っほしい。私には中国語がわかりませんが、漢字を見るだけで理解できる部分がありますよ。読み方がわからなくても、文字が認識できれば情報がある程度わかります。それだけでずいぶんと世界は広がります」

ヴォロビヨワ先生は長年の研究成果として政策研究大学院大学で博士論文を提出、2014年3月に本審査に合格した。博士論文の題目は「構造分解とコード化を利用した計量的分析に基づく漢字学習の体系化と効率化」だ。「博報財団の招聘事業に参加させていただいたおかげで、研究を進めて博士論文を完成させることができました」

Innovative Kanji Learning Methods for Learners from Non-Kanji Regions

Dr. Vorobeva joins her background in mathematics with her knowledge in linguistics to develop unique kanji instruction methods for learners new to the concept of kanji. Based on her analyses of kanji structures and various kanji groups during her first research period

in Japan as a Hakuho Foundation fellow, she devised new types of kanji indexes and instruction methods, and she has written an instructors' manual in Russian. During her second research period in Japan as a fellow, she applied quantitative analysis of kanji to develop a memorizing method rooted in associations based on the hierarchical structures of kanji. She also created a digital online textbook,

with which users can determine their own kanji learning sequences based on "networks of meanings of kanji." Dr. Vorobeva notes that conducting research in Japan enabled her to quickly seek opinions from Japanese speakers on her new methodologies, and participating in a diverse range of study groups led her to fresh ideas.



日本語学の見地から ベトナムの日本語教育を推進

チャン・ティ・チュン・トアン TRAN Thi Chung Toan

ベトナム社会主義共和国 ハノイ大学日本語学部 学部長

【研究タイトル】 ハノイ大学における基礎日本語文法テキスト作成

【招聘期間】 2012年4月1日～2012年9月30日

【受入機関】 早稲田大学

日本語学を背景とした 理論的な文法テキストを作成

近年、経済発展の最中にあるベトナムでは、日本語を初等教育の第二外国語の一つに採択しようという動きがあり、日本語能力試験の受験者が年々増えるなど、日本語学習の裾野が広がってきている。チャン・ティ・チュン・トアン先生は、ハノイ大学日本語学部の研究者として、また日本語教育者として、現場の指導から教材開発、外国語教育提言までを積極的に行ってきたキーパーソンだ。

「日本語教師が毎年増えていることは喜ばしいことです。しかし、より理論的な知識を持ち、実践のコミュニケーションにおいて、日本語を体系的な現象として理解した上で教えることが理想です」

そうした願いもあってトアン先生は、日本語文法テキストを完成させるために第6回招聘に応募した。

「数年がかりでベトナムで資料を集め執筆していた草稿をもとに、日本滞在中に『基

礎日本語文法』という教材を作成することに取り組みました。その際、早稲田大学日本語教育研究科の日本語教材研究・作成の専門家である吉岡英幸教授、元宇都宮大学国際学部の日本語言語学専門家である小池清治教授からご指導・ご指摘をいただきました。さらに帰国後は東京大学名誉教授である鈴木泰教授からご指導を受け、当書の内容、構成などについて、再度検討・修正した結果、最終的なテキストを出版できました。このテキストを実際の授業で使用したところ、指導が効果的なものになり、学生からの評判もよかったです」

日本語教育から日本文化・ 日本文学研究者の育成へ

「日本語文法についての本格的なテキストができあがることは、教師や学生だけでなく、日本研究者の励みにもなる」とトアン先生は考えている。日本語学の知識を持つことで、原典資料を深く理解でき、正確な翻訳に活かせるようになるなど、日本文

学・日本文化を専門にする研究者にも良い影響があると思われるからだ。「中国・韓国・欧米では、日本研究の優れた学者は同時に優れた翻訳者でもあります。これは日本語能力の高さだけでなく、日本語学の深い知識も備えているからだと言えます」

ベトナムでは、日本文学・日本文化の研究者はまだ少ない。日本語を学習したい、日本に留学したいという学生たちのゴールを、日本企業に就職することだけではなく、日本を研究することにも設定してほしいとトアン先生は語った。

Promoting Japanese Language Education in Vietnam through the Lens of Japanese Linguistics

As a scholar and an instructor of Japanese language, Prof. Toan has been active in developing teaching materials for Japanese language education and promoting foreign language education in Vietnam. During her period of research in Japan, Prof. Toan developed a textbook of basic Japanese grammar designed to provide a logical and systematic understanding of the language. Since its publication following her return to Vietnam, the textbook has improved effectiveness of instruction and has been popular among students. Prof. Toan hopes that better knowledge of the Japanese language will lead more students in Vietnam not only to seek employment in Japanese companies, but also to pursue research on Japanese literature and culture.

column 招聘から始まった交流

トアン先生とヴォロビヨワ先生の交流は、本フェローシップをきっかけに始まった。第6回招聘の最終報告会で、ヴォロビヨワ先生の発表に興味をもったトアン先生が、ハノイ大学で行われる第2回国際シンポジウム「ベトナムにおける日本語教育・日本研究—過去・現在・将来—」に参加してほしいと依頼したという。

シンポジウムには、ベトナムの研究者と、日本、中国、タイ、韓国などの研究者ら合計150名以上が参加した。基調発表として、国立国語研究所の横山詔一教授とヴォロビヨワ先生による「非漢字系学習者の文字認知特性に適合した漢字教授法の開発」

トアン先生による「日本語学部が歩んできた40年間を振り返って」などが行われた。このシンポジウムは、ハノイ大学をはじめ、日本語教育機関、日本語・日本文化研究機関などに、今後の教育や研究の戦略についての見通しを提供する場になったという。

ヴォロビヨワ先生は、ハノイ大学とハノイ国家大学に自作の教材を寄贈。トアン先生は「ベトナム人教師にも学習者にも役立っています」と語る。

Prof. Toan invited another Hakuho Foundation fellow, Dr. Vorobeva, to be a keynote speaker at a symposium in Vietnam, and Dr. Vorobeva donated instructional materials she developed to universities in Hanoi.

海外における日本文化研究の現在

本フェローシップは、第9回の募集から招聘対象領域を日本語・日本語教育に加えて日本文学・日本文化（日本文化研究）にまで広げた。いま、海外ではどのような日本文化研究がなされているのか。ここでは、諸外国のなかで最も日本文化研究の進んでいる地域のひとつであるアメリカ合衆国の研究・教育機関のうち、シカゴ大学、コロンビア大学、プリンストン大学、イェール大学における研究の現状と展望を紹介する。以上4つの研究機関と、日米の文化交流活動を行うジャパン・ソサイエティーへの取材から見てきた、日本文化研究における日本語習得の必要性や日本での滞在研究の意義、日本文化研究の今後の在り方に迫る。

The 9th Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship expands the eligible research fields to include research on Japanese literature and culture, in addition to research on Japanese language and Japanese language education. In this newsletter, we look into the current conditions and future prospects of research on Japanese culture at four leading US institutions – the University of Chicago, Columbia University, Princeton University, and Yale University. The interviews at the four universities and the Japan Society point to the necessity of Japanese language acquisition, the significance of conducting research in Japan, and future directions of research on Japanese culture.

多様化する日本文化研究とそのベースとなる日本語習得の重要性

各研究機関が共通して重要視しているのは、日本文化研究のベースとしての日本語習得だ。小説のように旧来からある文学のテキスト研究だけでなく、視覚芸術をあつかう研究においても、原典を言語の面から読解するテキスト分析に重点がおかれている。

また、最近の日本文化研究のトレンドとしては、ビジュアルアーツなど活字メディアをゆるがす新しい研究や、映画、テレビ、またインターネットやビデオゲームといったニューメディア、ポップカルチャーなどの研究の、急速な成長が挙げられもする。

「近代、現代を問わず、作品におけるオリジナルのテキスト分析は基本です。テキストの裏にある歴史的コンテキストを読み取ればよいという風潮もありますが、それも原典を読み込み、言葉の真意を読み取れてこそ。視覚芸術である映画においても、記号論やカルチュラル・スタディーズのアプローチとして、言語化されていない部分や背景を言語化することも重要とされています」（イェール大学 アーロン・ジェロー教授 日本映画研究）

イェール大学では、瀬戸正彦先生（日本語教育）らが編集した独自の教科書『すらすら』などを使用した3年間の徹底した現代日本語学習を行い、4・5年生では村上春樹や大江健三郎らの作品の原文精読を、ディスカッションも交えながら進めている。

研究大学であるシカゴ大学の場合は、日本語のみを研究対象としている研究者がいなくてもかかわらず、日本語教育のレベルが高いのが特徴だ。独自のアニメコースなどを通じて、日本の大学生が読む以上のレベルの教科書を使用し、3年生までに非常に高い日本語の読解能力が身につけられる。最終的には自分が読みたい論文を、言語主任と1対1で読むことが行われているという。



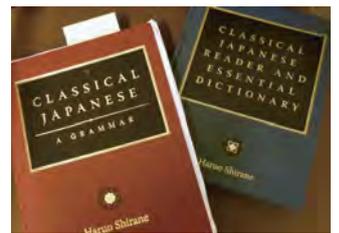
左上▶『すらすら』と『Japanese, The Spoken Language』

右上▶瀬戸先生（以上、イェール大学）



左下▶『Communicating in Japanese』と『英文 中級日本語』（シカゴ大学）

一方、言語・歴史・文学・宗教の4つの日本研究分野をもつコロンビア大学の東アジア言語・文化学部は、言語・日本語教育を非常に重要視している。日本文化領域の教授と日本語教師の連携も緊密で、現代のニーズに合わせてさまざまなジャンルの読み物を充実させた教科書『飛躍』などの教材開発を行うと同時に、日本語の成り立ちを学ぶために古語の習得にも力を入れている。「古語の文法から構造を把握することで日本語の歴史はもちろん、現代語もよく理解することができるはずです」（コロンビア大学 ハルオ・シラネ教授 日本古典文学）。シラネ先生らの編んだ『Classical Japanese』は、アメリカ全土の日本語古典教育に使用されている。



左▶ハルオ・シラネ教授の授業風景

上▶『Classical Japanese』（以上、コロンビア大学）

左から、コロンビア大学の鈴木登美教授（日本近代文学）、デイヴィッド・ルーリー准教授（日本文学・日本思想史）、ハルオ・シラネ教授、ポール・アンドラー教授（日本近代文学・映画）

「原文を読む力というきちんとした基盤があって初めて、自由で独創的なアプローチが可能になりますから」（鈴木先生）



大学の研究機関とは異なったアプローチで、アメリカと日本の文化の相互理解を深めるために活動しているのが、ジャパン・ソサイエティーだ。設立から40年余りを経た語学センターでは、文学、現代トピック、ビジネス、カラオケ、書道など、テーマや用途に応じたクラスを設けて、弁護士・医師・コンピュータ技師など様々な職種、15～80歳という幅広い年齢の受講者に支持されている。



「言葉はあくまで道具で、目的ではありません。ここに来る方々には、日本の文化を英語ではなく、日本語で読みたい、理解したいという強い目的があります」(ジャパン・ソサイエティー ディレクター 上村知代さん)

日本での滞在研究による生きた経験を

このように各研究機関では、幅広い領域での日本文化研究がなされ、ネイティブの日本語教師や豊富な資料を揃えているが、いずれの研究機関でも生の日本文化のなかに身を置く経験と、ニッチな領域の研究者とのネットワーク構築などのために、日本での滞在研究を重要視している。

日本語教育が会話重視となっているプリンストン大学では、文学研究者にとって重要なリーディングの強化のために、日本に渡っての研究・検証を推奨しており、博士後期課程の論文執筆前には日本への滞在を課している。学内に豊富な資料を持つはいても、日本でより詳細な周辺資料を網羅することは欠かせない。同じ日本語の文献でも、アメリカで読むのと日本で読むのとでは頭に入る感覚が違うため、現地の環境に身を置くことが大切とのことだ。日本の研究者と議論をし、お互いに刺激を与え合う交流を通じてネットワークが広がる利点もある。そうした経験こそ、帰

上▶プリンストン大学 下▶イエール大学



国後の研究の発展に大きく影響すると思われる。

イエール大学の博士課程でも同様に、日本語の習熟、博士論文の準備と、今後の研究のためのネットワークづくりにむけて、夏休みに日本に滞在することを促している。

「日本滞在中に、日本の研究者から『ジェロー先生の研究はすごく変わっていますが、必要です』と言われてとても嬉しかった。海外研究者をお客さん扱いせずにお互いの砦を崩して意見交換することは、双方にとってよい刺激となり、面白い研究が生まれるはず」(イエール大学 アーロン・ジェロー教授)



「日本語の環境に入って、英語を介さずに研究・資料に向き合う機会を日本に滞在している際に見つけて欲しい。それと同時にインタビューやフィールドワークをしたり、日本にただで自然と分かることも多々あるので、ぜひ日本での研究を行ってほしいと思います」(イエール大学 エドワード・ケームズ教授 日本古典文学 写真左) アーロン・ジェロー教授・右

シカゴ大学は、学内に2000本もの日本映画の資料を所蔵し、シカゴ美術館の協力も得て文献資料と映像資料に豊富にアクセスできる環境を持つ。それでも日本での研究は欠かせないという。たとえば、日本への留学が、研究テーマを大きく変更するきっかけになることもあるからだ。

「思想史の研究のために大阪大学に行ったとき、図書館で明治時代の出産に関しての文献をたまたま発見し、興味を持つようになりました。結局、それによって研究内容を『日本における出産の歴史』に変更するほどの出会いになったのです」(シカゴ大学 スーザン・バーンズ准教授 ジェンダー史・医学史)

ネイティブの日本人教授にも、一定期間日本に戻って日本語教育・日本文化のトレンドや情報をアップデートし、新しいものを求める学生のニーズに対応することが望まれている。ましてや海外の日本研究者にとって、日本での滞在研究をくりかえし行うことは、本国では得られない経験や人的交流の意味でも欠かせないことであると言えるだろう。

これからの日本文化研究に求められる学際的視点

最近では、研究機関共通の傾向として、東アジアのなかでの日本の位置づけを探るために、分野や国をクロスオーバーさせた研究、比較文学やトランスナショナルな研究が進められている。

コロンビア大学大学院では、外からの視点を取り入れることを重視している。研究者の半数は、カナダ、ヨーロッパ、アジアなど、アメリカ以外からの研究者だ。「日本のことを学びながら、多種多様なバックグラウンドを持つ研究者が交流することで、外か

らの視点を入れて比較する目を養うようにしています」(ポール・アンドラー教授 日本近現代文学・映画)。

イェール大学の日本研究部門もやはり、東アジア言語文化研究科に属している。分野をクロスオーバーさせながら研究を進められる環境があり、たとえば「漢詩が平安文学に与えた影響」といった考察もなされている。そのような研究には、アメリカ人と日本人の研究者が議論するだけでなく、アジアの他地域の研究との連携や、他の国の日本研究者も参加した交流が必要なことはいまでもない。



左▶「日本の研究者にとっても外からの視点を知る機会にもなり、お互いに良い刺激となる共同研究ができるでしょう」(シカゴ大学 マイケル・ボードッシュ教授 日本近代文学)

上▶日本関連図書の所蔵数で全米有数の規模を誇るシカゴ大学の図書館

一方、コロンビア大学のドナルド・キーン日本文化センターは、日本に関連する講演やパフォーマンス・イベントを企画している。イベントは、コロンビアの学生だけでなくニューヨーク在住の人にも開かれており、日本文化の入口として広く一般的な影響力を持っている。

同じくニューヨークのジャパン・ソサイエティーでは、コロンビア大学など、他の教育機関とも連携をとった講演会や展覧会をはじめ、さまざまなイベントを開催して、「日本文化に触れたい」という欲求を叶えるための取り組みを行っている。専門性の高い研究を習熟させると同時に、日本文化が幅広く普及することで、あらたな日本文化研究の領域が増えることを期待しているという。

80年代をピークに、日本語や日本研究に対する支援は減少しつつあるが、本フェローシップは国籍の制約なく、何度でも受けることができるため、息の長い支援が必要な日本文化研究を支える制度として期待されている。ここに挙げた研究機関はもちろんのこと、世界中の日本語・日本語教育、また日本文学・日本文化の研究機関がより積極的に学際的な視点を持ち、情報交換し交流を重ねることによって、今後の日本文化研究の可能性はさらなる拡がりを見せるだろう。

Diversification of Research on Japanese Culture and the Importance of Japanese Language Acquisition

All four institutions regard Japanese language acquisition as the critical basis for research on Japanese culture. Importance is placed on textual analysis of primary materials, not only for research on literary texts, but also for rapidly developing new research on visual arts and popular culture. At Yale University, students conduct close readings of novels in the original language, following a rigorous three-year course of language education in contemporary Japanese. Japan studies at Columbia University encompass Japanese language, history, literature, and religion. New teaching materials are developed by faculty members, and the acquisition of skill in reading classical Japanese is also

emphasized. The Japan Society strives for enrichment of mutual understanding between Japan and the US by offering courses on diverse subjects to a wider audience seeking to understand Japanese culture through Japanese language.

Inspiring Lived Experience through Research in Japan

The four institutions boast wide-ranging research on Japanese culture, with native Japanese language instructors and rich material resources. Research in Japan is nonetheless considered critical, as it allows scholars to acquire lived experiences and establish networks with specialists in specific research fields. At Princeton University, research in Japan is required for doctoral candidates. Researching materials in Japan and engaging with Japanese scholars are considered advantageous for reciprocal inspiration and the enrichment of scholarly networks, leading to further advancement of research. The University of Chicago has access to a large collection of Japanese literary and visual materials through cooperation with The Art Institute of Chicago. Research in Japan is nevertheless considered indispensable, allowing opportunities for discovering new research directions.

Interdisciplinary Perspectives for Future Research on Japanese Culture

Cross-disciplinary and transnational research has been expanding in recent years. The graduate program at Columbia University, where half of the scholars come from outside the US, strives to foster comparative perspectives through interaction among scholars with diverse backgrounds conducting research on Japan. Research on Japan at Yale University is also conducted in a variety of disciplines, providing an environment for cross-disciplinary research. The Donald Keene Center at Columbia University offers Japan-related talks and performances, providing a window to Japanese culture for the general public. While financial support for research on Japanese language and culture has declined since the 1980s, the Japanese Research Fellowship is open to researchers of any nationality, and allows applicants to receive funding multiple times, enabling support for long-term research. Prospects for research on Japanese culture will further expand with the promotion of interdisciplinary perspectives and information exchange among research institutions across the world.

上▶シカゴ大学 下▶コロンビア大学



本フェローシップの受入機関 I (受入中)

本フェローシップによる招聘では、7つの受入機関の中から、招聘研究者の研究内容にあった機関で研究を行うことができる。ここでは、現在招聘研究者を受入中の4機関について、それぞれの特色を紹介する。

There are seven host institutions for Hakuho Foundation Japanese Research Fellows to choose from as the affiliation that suits their own research objectives. This section introduces the characteristics of the four institutions that are currently hosting Hakuho Foundation fellows.

国立国語研究所

東京都立川市緑町 10-2

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

<http://www.ninjal.ac.jp>

国立の研究機関ならではの、日本語学の豊富なリソース

1948年に創設された国立国語研究所の研究組織は、言語に関する研究領域に応じて4つの研究系に分かれ、さらに領域を横断した「日本語教育研究・情報センター」等の3つのセンターが置かれている。

同研究所の業績を特徴づけるのが、コーパス*の開発と研究だ。webサイトでは、1億語を越える「現代日本語書き言葉均衡コーパス」など、共同研究の成果物である日本語コーパスを多数公開している。そのほか、日本語学習にも役立つデータベースの作成や、消滅危機方言の調査と保存のための総合的研究や方言地図の公開など、国立の研究機

National Institute for Japanese Language and Linguistics



関ならではの大規模な研究が行われている。

本フェローシップでは、第1回より招聘研究者を受け入れている。招聘研究者は同研究所の「外来研究員」として、専門性の高い12万冊以上の蔵書、資料、データベースの閲覧が可能となる。招聘期間中には、主に所内研究者が対象の「NINJALサロン」という研究発表会での発表が求められるほか、論文集への投稿資格が付与される。また、国内外の研究者による定期的な講演会、研究所内の共同研究プロジェクトの研究発表会、一般にも公開されているフォーラムなど、他の研究領域の研究

者との交流の機会も多数用意されている。

本フェローシップを通じて、まずは同研究所の豊富なリソースのもと、研究者それぞれの研究が深化すること、さらに、その成果が海外の日本語研究の活性化につながることを期待しているようだ。

※コーパス……言語学用語で、自然言語（話し言葉、書き言葉）を構造化し、大規模に集積したもの。

Exceptional Resources of a National Research Institution

The National Institute for Japanese Language and Linguistics has excelled in development and analysis of Japanese language corpora, and conducts research projects at a scale possible only for a national research institution. The institute has welcomed Hakuho Foundation fellows since the inception of the program. Fellows can access over 120,000 books, documents, and databases housed at the institute, present papers in study groups, and submit papers to the institute's publications. There are ample opportunities for scholarly exchange with domestic and international scholars in other research areas through lectures and forums. With its rich resources, the institute hopes to help fellows advance their own research, and to galvanize Japanese language research abroad.

早稲田大学

Waseda University

東京都新宿区西早稲田 1-7-14

学校法人 早稲田大学

国際部国際課

<http://www.waseda.jp>

国内最大規模の外国人研究者受入体制

日本を越え、世界に通用するグローバルユニバーシティを目指している早稲田大学。創立者・大隈重信おおくましげのぶが説いた「東西文明の調和」に基づき、創立当初から留学生を積極的に受け入れてきた。現在では、毎年約200名を越える外国人研究者を受け入れている。専属スタッフによる細やかなサポート体制と、宿舎や研究室など、都心のキャンパスでの研究に関わる環境を整え、今後さらなる外国人研究者の受入体制の整備を進めているという。

本フェローシップでは第4回から日本語教育研究科で招聘研究者を受け入れ、第9



回からは文学研究科も受入先として加わっている。

招聘研究者の受入手続、寮や研究室等の手配を行う同大の国際部国際課では、外国人研究者交流会を企画したり、日本文化を体験できる機会の提供も行っている。「日本の持つ素晴らしさを招聘研究者の本国に伝えたい、そして、また早稲田に戻ってきて欲しい」という思いで、コミュニティづくりを大切に、互いに情報交換しやすい環境を用意しているという。

招聘研究者には滞在期間中、大学の正式な身分と、それに伴う身分証明書や個人メ

ールアドレスが付与され、図書館などの資料やデータベースへのアクセスが可能となる。とくに人文系では、国内外の貴重な演劇・映像資料を集めた演劇博物館の資料を求めて来日する研究者も多いという。

国内最大規模の大学ならではの、外国人研究者へのサポート体制で、快適で充実した研究環境が期待できるだろう。

One of Japan's Largest Hubs for International Researchers

Waseda University aims to become one of the world's leading global universities. The university has welcomed scholars from abroad since its establishment, and currently accepts over 200 international scholars every year. The visiting scholars are provided with offices and accommodation, and have access to the university's libraries and databases, including its valuable collections of theatre and visual materials. The university places emphasis on building a sense of community among its international scholars, and regularly holds networking and cultural events that facilitate scholarly exchange. The university's well-equipped structures of support provide international scholars with a comfortable and productive environment for research.

お茶の水女子大学

東京都文京区大塚 2-1-1
国立大学法人 お茶の水女子大学
<http://www.ocha.ac.jp>

海外の 日本語教育研究者に 寄せる期待

お茶の水女子大学は、本フェローシップの第4回から、毎年1~2名の招聘研究者を受け入れている。窓口となるのは、同大学のグローバル教育センターだ。

同大学では、かねてより日本語教育研究に重点を置いている。とくに東南アジアや東ヨーロッパなど、今後の日本語教育研究の発展が期待される地域の研究者に対し、来日滞在による研究の深化を期待しているという。

招聘研究者には、学内に研究室が用意され、希望に応じて、キャンパスに併設された单身宿舎に入居することが可能だ。また、期間中の公開講演会での発表、国際合同授業への参加を通して、同大学の教員と

Ochanomizu University



の情報ネットワークも強化されている。アットホームで密度の高い交流環境は、これまでの招聘研究者からも評判が高い。

こうした交流は、招聘期間終了後の研究者同士のネットワークの形成にとどまらず、大学同士の国際交流協定締結などの国際交流の促進にも寄与しているという。

また、お茶の水女子大学は2012年度以降「グローバル人材育成推進事業（全学型）」に採択されているが、こうした海外教員を迎えての教育・研究交流はキャンパスのグローバル化の一翼をも担っている。今後も本フェローシップを通じ、海外での日本語教育研究の発展と、世界規模の交流拡大を期待しているそうだ。



「本フェローシップを通じて、研究者同士、大学同士でパートナーシップを結べる人材を期待しています」と語るグローバル教育センター長の森山新教授。専門は日本語教育学、応用言語学など

Supporting Foreign Researchers of Japanese Language Education

Ochanomizu University has welcomed one to two Hakuho Foundation fellows every year. The university has promoted research on Japanese language education in particular, and hopes for further development of the field outside Japan and for the expansion of global exchange by assisting promising foreign scholars conduct research in Japan. The university provides offices and accommodation for visiting scholars, assists them in building networks with faculty members, and organizes public lectures and international joint classes. These efforts have expanded networks not only for individual scholars, but also on the institutional level, leading to the establishment of partnerships with universities abroad.

東京外国語大学

東京都府中市朝日町 3-11-1
国立大学法人 東京外国語大学
国際日本研究センター
<http://www.tufts.ac.jp>

世界各国の 多様な視点による 日本語・日本学研究

日本有数の外国語大学として、学部・大学院を合わせて、日本語を含む27専攻語・地域についての教育研究体制を擁する東京外国語大学。本フェローシップの第6回から招聘研究者を受け入れている国際日本研究センターは、国内外における日本語学習者の多様化に対応した日本語教育の推進に寄与するため設置された。現在、日本語、日本学、対照研究等を行う5つの部門で構成されている。招聘研究者には、同センター内に研究スペースが用意される。受入担当教員の指導だけでなく、他のセンター教員の授業やゼミの聴講も可能で、資料の提供なども行なわれる。また常駐の事務局スタッフが日常的な生活の相談やニーズ

Tokyo University of Foreign Studies



に対応するなど、積極的なバックアップ体制が取られている。

同センターでは年間に多くの国際シンポジウムや講演会、研究会や若手ワークショップを開催する。とくに国内外の講師を招いて行う夏季セミナーは好評だ。また、日本研究を発展させるためのプロジェクトや協働研究を通して、研究者同士のネットワークづくりを進めているという。異なる専門領域を架橋する同センターの活動は、国内外の研究者にとって大きな刺激となっている。

センター長の野本京子教授は、「今後の研究には、多様な視点を相互に介入・交差させることがますます重要になっていく」

と語る。招聘研究者には、従来の日本語・日本学研究を踏まえつつ、独自の視点に基づいた研究を期待するとともに、多くの研究者との交流によって、自らの研究を発展させていくことを願っているという。

Promoting Research on Japanese Studies through Diverse Perspectives from around the Globe

Tokyo University of Foreign Studies boasts education and research on 27 languages and geographic regions. The International Center for Japanese Studies, where Hakuho Foundation fellows are affiliated, promotes Japanese language education that serves the diverse needs of those who study Japanese language in and outside Japan. Visiting scholars can attend classes and obtain materials for their research, and are provided with research space and general support from staff who attend to their various needs and concerns. To promote the development of creative research through the interaction of diverse perspectives, a variety of events are held, including international symposiums and workshops, and scholarly networks are enhanced through projects and collaborative research.

本フェローシップの受入機関Ⅱ (受入開始)

本フェローシップの受入機関として、第9回招聘以降、3機関が加わる。ここでは、第9回から招聘者受入を開始する国際日本文化研究センターと、第10回から受入を開始する立命館大学の2機関を紹介する。

Three additional institutions will join the program as host institutions for Hakuho Foundation Japanese Research Fellows. This section introduces the International Research Center for Japanese Studies, which will begin accepting fellows in 2014, and Ritsumeikan University, which will join in 2015.

国際日本文化研究センター

International Research Center for Japanese Studies

京都府京都市西京区御陵大枝山町 3-2
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
<http://www.nichibun.ac.jp>

知見を深める共同研究で、 研究の幅を広げる

国際日本文化研究センターは、日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究する国立の大学共同利用機関。外国の日本研究者を支援するという目的のもと、25年にわたり外国の研究者を受け入れてきた実績がある。

本フェローシップでは、第9回から招聘研究者の受け入れを開始する。同センターでは、招聘研究者は「外来研究員」の資格で研究を行う。受入窓口となるのが、センター内の海外研究交流室だ。受け入れの手続きから研究上の相談、滞在期間の日常生活の相談まで、一貫して対応を行っている。

施設内にある図書館には基本図書が40万冊以上所蔵されており、学術的な価値の高い巻物などの貴重図書の閲覧も可能だ。また海外から来た研究員のための宿泊施設「日文研ハウス」には単身者用と家族用がある。



図書館の内部。同センターでは、海外・外国語で書かれ出版された日本についての図書を「外書」と呼び、重点的に収集しているという

専門分野を越え、 研究者が相互に知見を高め合う

国際日本文化研究センターが最も力を入れている活動が「共同研究」だ。2014年度は、16本の共同研究がある。「日本仏教の比較思想的研究」「昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析」な



ど、多様なテーマが揃っている。

共同研究の大きな特徴は、各テーマをさまざまな分野の研究者で議論すること。1グループは平均30人程度、専任教員のみならず、外国人研究員や他の大学の研究者、大学院生も参加する。社会学、言語学、歴史学、文学など、それぞれの専門が相対化され、より多角的な知見が得られるという。またその場で形成される研究者同士のネットワークも、研究者にとって大きな財産となる。



各共同研究の内容や組織などの概要パネル。紹介しているのは、招聘研究者の受入担当であり、研究と国際協力の総括を行っている劉建輝教授

共同研究以外でも、毎月研究者がテーマを決めて発表する「木曜セミナー」、英語による「イブニングセミナー」、外国人研究者が一般市民向けに講演する「日文研フォーラム」など、研究者同士や、地域との交流を深める機会が多いことも、同センターの大きな特徴だ。研究の場を越えた人脈拡大を重視しており、所長をはじめ専任教員らによる、自主的なコミュニケーションの場も多く設けているという。また、海外研究交流室が企画する、年に一度の海外シンポジウムは、研究テーマと合致すれば、招聘研究者も参加可能だ。

国際日本文化研究センターのこうした方針に刺激を受け、招聘期間中に新しい研究

テーマを発見する研究者も多いという。もちろん、海外の日本研究者にとって、日本の伝統文化の中心地である京都に滞在研究することの重要性も大きい。

学術交流を通して切磋琢磨を促す同センターでは、高い意識と明確な目的をもつ研究者を求めているという。最近では、以前から多かった近代史や文学研究だけではなく、古事記や漫画・映画など、様々な分野の研究者が海外から集まってきているようだ。

国際日本文化研究センターでは、本フェローシップとの連携を通じて、海外の日本研究の発展にも期待を寄せている。アフリカや南米などのように日本研究がこれから育っていく地域や、昔は日本研究が高い水準にあったが最近では弱まっている地域などで、研究を加速させたり、レベルを回復させることも考えていきたいという。

Expanding the Breadth and Depth of Research through Collaboration and Cross-Disciplinary Exchange

The International Research Center for Japanese Studies is an inter-university research institute for international collaborative research on Japanese culture and history. The center has welcomed international scholars conducting research on Japan for 25 years, and will begin its acceptance of Hakuho Foundation fellows from 2014. Visiting scholars have access to the center's general collection of over 400,000 books, as well as its rare book collection housing valuable picture scrolls. Accommodation for international scholars is also available. As the center's primary focus is on collaborative research, a diverse range of research is conducted by groups of scholars from various disciplines, enabling the development of multilateral knowledge and scholarly networks. The center also offers abundant opportunities for interaction among scholars and local residents outside of the research context. The center's location in the heart of traditional Japanese culture, Kyoto, also provides valuable experience to scholars from abroad. The center hopes the collaboration with the Hakuho Foundation will further the development of Japanese studies outside Japan, particularly in regions where interest in research on Japan has been waning over the years, as well as in areas such as Africa and South America where there are prospects for future growth for research on Japan.

立命館大学

京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学衣笠キャンパス
<http://www.ritsumei.jp>

Ritsumeikan University

日本の伝統文化の 本拠地・京都で、 学際的な日本文化研究を

第10回から本フェローシップの受入機関に加わる立命館大学。京都、滋賀、大阪の3拠点横断で、研究大学化、グローバル化を進めている。通常、大学の研究は学部単位の縦割で行われることが多いが、文系理系の横断を含め、全ての研究が学部を越えたワンストップの機関で行われていることが同大学の特徴だ。

ワンストップ体制による 研究支援

人文社会科学系分野の研究所が設置されている衣笠総合研究機構には、恒常的設置と時限的設置、合わせて15の研究所・研究センターがある。同機構をまとめるのが、研究支援の窓口となる「リサーチオフィス」だ。科研費の申請や研究会・国際シンポジウムなど組織的活動の支援、学際的な共同研究のコーディネートなどを行っている。本フェローシップによる招聘の受入窓口も、この「リサーチオフィス」となる。

伝統とテクノロジーが 融合した研究

衣笠総合研究機構のなかで、特に先進的領域の研究機関として注目を集めるのが、1998年に設置されたアート・リサーチセンターだ。そこでは、日本の伝統美術や歴史・文化資料など、京都を中心とした日本の伝統文化研究や、文化財のデジタル・アーカイブ化などが行われている。人文知と情報知が融合した文理融合型の研究手法を用いて、デジタル・ヒューマニティーズの日本における重要研究拠点となっている。「日本文化研究とはいえ、日本に縛られることなく、海外の研究機関と連携しながら活動しています。国境なく研究が発展していくのが、当センターの大きな特徴です」(アート・リサーチセンター副センター長



鈴木桂子教授)と語る通り、研究成果の多くはバイリンガルで発表されている。



「陶磁器や漆器など、立体作品のデジタル・アーカイブ化プロジェクトは、実際に作品に触れることができる。それが日本文化研究者にとって得難い機会となる」と語る鈴木桂子教授

ロンドン大学 SOAS、ボストン美術館、コロンビア大学などと連携しており、京都にしながら世界の美術館や大学と共同でプロジェクトを展開することができる。アート・リサーチセンターは立命館大学における、海外からの研究者のメイン受け入れ先のひとつでもある。



アート・リサーチセンター。デジタル映像撮影装置と映像アーカイブ作成装置を備え、資料に合わせた収蔵庫をもつ

もうひとつの先進的領域の研究機関が、ゲーム研究センターだ。日本で唯一のゲーム分野の学術機関として2011年に設置された。任天堂の「ファミリーコンピュータ」開発者がセンター長をつとめる同センターは、国際的なゲーム領域研究の、日本でのハブ機関になりつつあるという。

招聘研究者は、プロジェクトベースでの受け入れとなる。受入期間中は「客員協力研究員」として、図書の貸出や学内のネットワークへのアクセスなど、同大学の教員

とほぼ変わらない便宜供与が受けられる。2016年には、研究者用の設備も整った新図書館が完成するという。宿泊施設として、外国人留学生・教員用のインターナショナルハウスを提供するほか、単身者用と家族用のアパートも確保している。

伝統とテクノロジーが融合した新領域の研究機関は、招聘研究者が行う日本文化研究の幅を広げてくれるに違いない。

Interdisciplinary Research at the Home of Japanese Traditional Culture, Where Technology and Tradition Converge

Ritsumeikan University will begin its acceptance of Hakuho Foundation fellows in 2015. Based in Kyoto, Shiga, and Osaka, the university has been advancing as a global research institution leading interdisciplinary research. One of the notable research institutes on campus is the Art Research Center, where digital archives of traditional arts and historical and cultural materials are developed, and transnational research merging the humanities and sciences are conducted. Collaborative projects are carried out through partnerships with universities and museums in the US and the UK, and the results are often presented in a bilingual format. Ritsumeikan Center for Game Studies(RCGS), directed by the inventor of the Nintendo "Family Computer," is the only academic institution in Japan focused on research in game studies, evolving into a major hub for international research in the field. Visiting scholars at the university will have access to the libraries and online databases, and accommodation for international scholars is also available. This innovative research institution, where tradition and technology converge, is sure to expand the breadth of research for visiting scholars of Japanese culture.



2009年よりスタートした、世界無形文化遺産の祇園祭をデジタル・アーカイブし、文化の修復・継承、活用に資する、デジタル・ミュージアム研究プロジェクト。写真は、150年ぶりに復活する大船鉦を3Dで再現したもの

◆ここで紹介した2機関以外に、第9回招聘からは、京都大学も本フェローシップの受入機関に加わる。
国立大学法人 京都大学 Kyoto University : 京都府京都市左京区吉田本町 <http://www.kyoto-u.ac.jp>

世界における日本語・日本語教育研究および日本文学・日本文化研究の拡大、振興を図ります。

博報財団「国際日本研究フェローシップ」

本フェローシップは、海外で日本語・日本語教育・日本文学・日本文化に関する研究を行っているすぐれた研究者を日本へ招聘し、滞在型研究の場を提供することで、世界における日本研究の基盤をより充実させ、研究者の活動を通じて、日本への理解を深めることを目的としています。

Advancing international research into the Japanese language, Japanese language education, Japanese literature and Japanese culture.

Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship

With the goals of further strengthening the fundamentals of international research into Japan and deepening international understanding of Japan through researchers' activities, the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship invites leading international researchers of the Japanese language, Japanese language education, Japanese literature and Japanese culture to Japan to conduct residential research.

【対象となる研究】

- 日本語・日本語教育研究
- 日本文学・日本文化研究

【応募資格】

日本語・日本語教育・日本文学・日本文化に関する研究を行う海外の研究者

※将来性のあるすぐれた研究業績を有する大学の教授、准教授、助教授およびこれらに相当する研究職歴を有する者。

- 日本語で研究・交流を遂行するのに十分な日本語能力を有すること。
- 日本以外に在住し、日本以外の国籍を有する者。
(ただし、日本以外の国におおむね10年以上在住し、当該国の学会などで活躍している日本国籍の研究者を含む)
- 招聘期間中、継続して日本に滞在することが可能であること。

【助成の内容】

- 渡航費、滞在・研究費、住居費など日本での研究に必要な経費を負担します。
- 研究期間は長期(12ヶ月)と短期(6ヶ月)が選択できます。
- 年間の招聘研究者数は10～15人の予定です。

【来日中の研究活動】

下記のいずれかの受入機関の協力を得て、研究を行います。

- 国立国語研究所
- 国際日本文化研究センター
- お茶の水女子大学
- 京都大学
- 東京外国語大学
- 立命館大学
- 早稲田大学

詳しくは、下記ホームページをご確認ください。

<http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/program/>

本フェローシップに関するお問い合わせ

博報財団「国際日本研究フェローシップ」事務局
〒105-0012 東京都港区芝大門2-1-16 芝大門 MFビルB1階
(株)イーサイド内
TEL: 03-6435-8140 / FAX: 03-6435-8790
Email: ip-office@hakuhofoundation-ip.jp

Eligible research

- Japanese language and Japanese language education research
- Japanese literature and Japanese culture research

Eligible researchers

International researchers working in the fields of Japanese language, Japanese language education, Japanese literature or Japanese culture. Applicants should be university professors, associate professors or assistant professors who have outstanding research results, or other persons with equivalent research backgrounds

- Must have sufficient Japanese language proficiency to be able to conduct research and interact in Japanese
- Must be non-Japanese nationals residing outside of Japan (Researchers with Japanese nationality who have resided outside Japan for 10 years or more and are active in the academic community, etc. of their current country of residence will also be considered)
- Must be able to stay in Japan continuously for the duration of the Fellowship period

Fellowship content

- Airfares, residential research expenses, housing subsidy and other expenses necessary for conducting research in Japan
- Long-term (12-month) and short-term (6-month) fellowships are available
- Around 10-15 fellows will be invited each year

Receiving organizations

Invited fellows will conduct their research with the cooperation of one of the following receiving organizations:

- International Research Center for Japanese Studies
- Kyoto University
- National Institute for Japanese Language and Linguistics
- Ochanomizu University
- Ritsumeikan University
- Tokyo University of Foreign Studies
- Waseda University

Refer to the Application Guide for full details

<http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/english/program/>

Contact

Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship Secretariat
c/o e-side, Inc., B1 Fl., Shiba-Daimon MF Bldg., 2-1-16 Shiba-Daimon, Minato-ku, Tokyo 105-0012, Japan
Tel: +81-(0)3-6435-8140 Fax: +81-(0)3-6435-8790
Email: ip-office@hakuhofoundation-ip.jp

発行日：2014年6月10日

発行：公益財団法人 博報児童教育振興会

編集：早稲田文学編集室 窪木竜也 北原美那 朴文順

編集協力：早稲田大学 十重田裕一 市川真人

翻訳：常田道子 デザイン：奥定泰之